文に関する日中対照研究
−文概念と文構造を中心に−

朱 芬
華東政法大学日本語科
zhufen@ecupl.edu.cn

1. はじめに

ゼロ照応や主語省略に関する日中対照をめぐる先行研究[1)]では、「中国語より、日本語のほうがゼロ照応が多く使われている」「日本語の主語は文を超えて省略されても問題ないが、中国語はいちいち主語をつけないとわからなくなる」などの論述がある。そのほか、「日本語は長文を好むが、中国語は短文を好む」「日本語は視点固定型の言語であるのに対し、中国語は視点移動型の言語である」２）などの論述もある。

これらの研究にはいくつかの問題点があると思われる。

（1）省略されるものは主語だろうか、主題だろうか。主語・主題の概念を区別しなければならない。

（2）日本語の文と中国語の文とは同じものだろうか。

（1）に関しては、すでに朱芬（2011；2012）では論じているため、本稿では主に（2）について論じたい。つまり、日中両言語における文の概念を対照して、日中文構造の面から、日本語と中国語における主題省略の特徴、視点類型の特徴などについて分析したい。

2. 日中学校文法（規範文法）における文の分類及びその認定

総じていえば、どの言語にも一つの完結した言明を表す言語表現の単位として「文」がある。中国語で言うと、「句子/句」であり、英語で言うと、「sentence」である。

しかし、「語」「文」「文章」などの文法単位の名称は、最初どのように生じたのだろうか。ここでは、日中両言語におけるこれらの概念の成立が、歴史上印欧語の影響を受けたものであることに注意しておきたい。

2.1 日本語の学校文法における文の分類

「文は一つまたは二つ以上の文節からなり、一つの文には原則として一つ以上の切れる文節がある。一つの文では、文節は切れずにつながってゆき、最後の切れる文節によって文は統一され、完結する。文が結合して連文節を作るが、最高次の連文節が文となる。」（三好行雄等 1979：316）

文の分類には性質上の分類と構造上の分類があるが、ここでは、主題省略の特徴と関係が密接である構造上の分類を取り上げたい。

句を基にして文を「単文」と「複文」という二種にわけられる。「複文」にはまた「有属文」

「重文」「合文」がある。

「単文――一つの句で構成されるもの。複文――二つ以上の句が集まり、一体となったもの。有属文――その中に付属句をもつもの。重文――二つ以上の句が並列的に結合したもの。合文――対等の価値をもつ句が合同しているもの。」

(1) 春が来たのがうれしい。(有属文)

(2) 松は青く、砂は白い。(重文)

(3) 春は来たが、風は冷たい。(合文)

もう一つの構造上の分類には「単文」「重文」「複文」がある。(三好行雄等 1979：316)

2.2　中国語教育文法における文の分類及びその認定

中国語教育文法にも「単文<単句>」と「複文<复句>」の区別がある。

(4) 我知道，前途是光明的，道路是曲折的。(//前途は光明で、道路は屈折であることは知っている。)

(5) 前途是光明的，道路是曲折的。(//前途は光明で、道路は屈折である。)

(6) 虽然前途是光明的，但是道路是曲折的。(//前途は光明であるが、道路は屈折である。)

例 (5) と例 (6) は明らかに「複文」だと認定されるが、例（4）については「単文」だと認定されるほうが多いが、「複文」だと判断する意見もある。

3.　英文法の影響（規範文法）から記述文法へ

3.1　英文法の影響

中国語では、単文と複文の区別について、次のような観点がある。区別の起源は 1904 年に出版された厳複<严复>氏が書いた英文法を紹介した『英文漢詁<英文汉诂>』という本である。つまり、英文法の名称を訳したものである。

これに対して、日本でも似たような意見がある。

三上（1979）は「構造上の単文、重文、複文の区別は無意味である」(三上章 1979:51) と批判して、高橋（1934）を引用した。

> 真に国語の構成を知ろうとするには、まず第一に英文典流の無益有害な単文、合文（重文)、複文の説明を、全然破壊しなければならぬ。(高橋竜雄『国語学原論』34)

図１英文法影響下のセンテンス相関名称の対照（s＝sentence）

英語	clause	simple s	compound s	complex s
中国語	子句/小句	単簡句	繁句之合沓句	繁句之包孕句[3)]
日本語	節	単文	重文・合文	複文

3.2　日中両言語における文とは何か——文と句（文節）[4] を区別する

単文、重文、複文のような構造上の区別に代わるものの探求として、三上章（1979）はセンテンスの区切り方を探求し、終止法、中立法、条件法、連体法等を挙げている。本稿では、日中対照の視点から、日中両言語における「文とは何か」「文はいかに成立するか」という問題を探求する。

上記の例文（1）～（6）を振り替えてみる。(2）と（5)、(3）と（6）はほとんど同じ構造であり、問題になるのは（1）と（4）である。

（1’）（￢/私は）春が来たのがうれしい。//春天来了，（￢/我）好开心。

（4’）我知道，前途是光明的，道路是曲折的。

（￢/私は）前途は光明で、道路は屈折であることは知っている。

もう少し長い例文を見てみよう。

(7) ①踊り子$_i$はやはり唇をきっと閉じたままａ一方を見つめていたｂ。②私が縄梯子に捕まろうとして振り返った時ａ、￢$_i$さよならを言おうとしたがｂ、￢$_i$それも止してｃ、￢$_i$もう一ぺんただうなづいて見せたｄ。（川端康成『伊豆の踊り子』）

ａ舞女$_i$仍旧紧闭双唇，ｂ￢$_i$凝视一方，ｃ我回头欲抓绳梯时，ｄ（￢$_i$/她）想必欲道再见吧，ｅ￢$_i$却也未说出口，ｆ￢$_i$只再度点了点头。

(8) ａ杨志$_i$取路，ｂ不数日，￢$_i$来到东京，ｃ￢$_i$入得城来，ｄ￢$_i$寻个客店，ｅ￢$_i$安歇下，ｆ庄客$_j$交还担儿，ｇ￢$_i$与了些银两，ｈ￢$_j$自回去了。（施耐庵《水浒传》）

①楊志さん$_i$は出発してａ、数日も経たないうちに、￢$_i$東京（中国宋の時代の首都）に着いたｂ。②￢$_i$都内に入ってａ、￢$_i$旅館を見つけｂ、￢$_i$泊まりついたｃ。③￢$_i$荷物を返しにきた荷担ぎさんにお金を払ってａ、帰ってもらったｂ。

上述したように、「センテンス（sentence)」とはもともと西洋文法から伝来したものであり、日本語や中国語の場合は、判断に迷う場合が多い。読点は「文中の意味の切れ目などに添える符号」だと『大辞泉』には書いてあるが、「意味の切れ目など」というのは曖昧で、「音声の停頓（ポーズ）にも添える」ことを暗示しているのだろうか。また、句点は文の切れ目に添えて意味完結を表すとされるが、意味完結というのも主観的である。以上の例（1’）（4’）（7）（8）を観察してみるとわかるが、句読点のつけ方は唯一ではない。日本語には活用があるので、文を完結させたい時には終止形にすればよいが（それにしても、文を完結させたくない時、終止形にせずにだらだら言ってゆく方法もある)、中国語にはそのような変形もないため、形態的に明らかな分の切れ目を判断するのが難しい。

したがって、日中両言語における文は主観的なものだと思われる。そこで、文法現象を対照しようとする時、文に関する基準単位は何かを弁えなければならない。句を文と認定するのも日中両言語においてよくあることである。基準単位が違うと、対照の結果も異なる。１で挙げ

た先行研究の論述は次の①と④とを対照した結果だろう。①と②、③と④を対照すると、結論が違ってくる。

	句の長さ	句を超える省略	主語/主格	視点類型
①中国語の句	短い	主語省略	一致しない	移動型
②日本語の句	短い	主格省略	一致しない	移動型

図２ 句を基にした日中対照

	文の長さ	文を超える省略	話題/主題	視点類型
③中国語の文	長い	話題省略	一致している	固定型
④日本語の文	長い	主題省略	一致している	固定型

図３ 文を基にした日中対照

4. 余論：意味上の区切りと音声上の区切り――意味停頓と音声停頓を区別する

文と句を区別することは、句点のつけ方にかかわるが、意味の停頓（ポーズ）と音声の停頓を区別することは、読点のつけ方にかかわる。次の例（9）において、「‖」の前の読点と「｜」の前の読点とは質が違うだろう。これについては今後の課題とする。

（9）尤其郑德富为什么**不<u>像当年那样</u>①‖对她亲热了**,｜反而像对仇人似的拿那奇怪的白眼仁盯着看她？（楊沫『青春之歌』）

中でも、鄭德富がなぜ**<u>昔のように、</u>①‖じぶんにしたしくしてくれず**、｜あべこべに、仇にでも出会ったように、あの奇怪な三白眼で、じぶんを見つめるのか？（中日対訳コーパス：2975 行より）

注

１） 例えば、小川泰生（1997）, 劉麗華（2001）, 劉麗華（2003）などがあげられる。

２）彭広陸（2008）「類型論からみた日本語と中国語――視点固定型の言語と視点移動型の言語」『中日理論言語学研究会第 12 回研究会発表論文集』を参照。

３）現代中国語文法教育現場では、「繁句之包孕句」を単文と認定することが多いが、これを複文と認定する見解もある。

４）句と文節はここでは区別しない。文の中の付属節を指すが、独立することもできる一つの「言葉のひとまとまり」のことである。

参考文献（一部）

三上章, 1979,『日本語の構文』（第 4 版）, 東京:くろしお出版。

三好行雄等, 1979,『新総合国語便覧』, 東京:第一学習社。

呂叔湘, 1979,《漢語語法分析問題》, 北京:商務印書館。